

## 人生の贈りもの

### 法を作る側へ、裁判官から志望変更

京大人文学部研究所長 山室信一(63)

3



大学卒業時、同窓生と旅行した静岡県熱海市で(右)「学生時代は池袋や新宿の映画館に通いました。権力闘争を描いたヤクザ映画は政治そのものです」本人提供

柔道少年から数学少年を経て、大学の進学先は東大法学部でした。

父は弱い人の方になれるからと私を裁判官にさせたかったようです。判決文はきれいな字で書かなければならないからと言われ、小学1年から書道塾に通いました。それで自然ななりゆきで法学部に入りました。でも当時は憲法や基本的人権の尊重を強く主張する裁判官が再任されない問題がクローズアップされていて、自分の意見を出せない裁判官になっても意味はないように思うようになりました。

——時代が悪かった？  
——どうしても裁判官になりたか

ったわけではなかったんです。興味があったのは政治。幼いころから本や雑誌を読んでいて、人間劇としての政治に興味があった。権謀術数の駆け引きがあり、非情な結末もある。自分自身は政治的な人間ではないのですが、関心はありました。

——入学は全共闘の大学紛争後の1971年でした。  
反権力という運動自体が時代遅れになっていました。クラス討論会をしても政治を熱っぽく語るのには2、3人。政治的意見を表明すること自体がはばかれるような雰囲気でした。

——授業はどうでしたか。  
大学紛争を受けた大学改革で1年生から専門科目を履修できるようにだったので、著名な政治学者だった京極純一教授の講

義を受けました。先生は開口一番「高校を出たばかりの君たちに政治学がわかるはずがない。50歳、60歳になって初めて理解できるものだ。ここで教えてもしょうがない」と、独特のユーモアを交えた口調で話されました。人間がわからないと政治がわからないというメッセージだ

と思います。それからいろんな人生を疑似体験したいと小説を読むようになりまし。堀谷雄高、椎名麟三、野間宏、ドストエフスキー、トルストイとか。勉強もしましたよ。法学者のカール・シュミットやハンス・ケルゼンの研究で知られた長尾龍一先生のゼミに入りました。先生が翻訳中だったシュミットらの原稿を示され「これ、どう思うか」と聴かれるので、必死

で読みました。卒業後も先生が東大経済研究者の岩田昌征さんと始められた中国古典の読書会に誘っていただきました。

——卒業後の進路はどうやって決めたのですか。  
政治に興味はあったものの、なにをしたいのか具体的な職業像はありませんでした。4年生の夏休みが終わっても就職が決まらずにいたとき、東大・本郷の図書館で高校時代からの友人の岩崎隆二君(現・参議院法制局長)に会いました。彼は参議院の法制局に入って法律の勉強を続けるつもりだと言い、「政治に関心があるんだったら法制局はどうか」と勧められました。法制局の採用募集すら知らなかったため、彼がいなければ私の運命は変わっていたはずなんです。裁判官には不向きだと思っていたので、父には「法を執行する側ではなく、作る側になりたい」と報告しました。

(聞き手・河野通高)